

# 随想・回想・旅行記

## 福井高等工業学校 初代校長 関盛治先生と胸像台座

福井大学工業会理事長

川上英男

### 発端

2006年、大学構内の整地工事を担当していた三越建設(株)の臼井武司社長(当時専務、福井大学建築学科 昭和42年卒業)から電話が入り、「花崗岩の台座を処分することになったが、よろしいか」と問い合わせがあった。その台座とは、旧福井高等工業学校の正面玄関付近(工事当時は自転車置き場)に横倒しになっていた四角柱で、以前から初代校長の胸像台座と伝え聞いていたものと想像できた。そこで、「処分しないで、取りあえず近くに据えてほしい」と頼んだ。

台座を見に行くと、芦原街道沿いの留学生センター南側植込みに立ててあった。胸像と正面銘板は、第二次大戦中に国の金属回収に供出したとの伝聞通り、取り外されていた。背面には『昭和九年十一月三日 卒業生一同』と彫り込んである(後掲の写真3参照)。

卒業生が校長胸像を設置するのはなかなか大きな事業と思えるので、その経緯を辿って見ることにした。

### 初代校長 関盛治先生のプロフィール

初代校長 関盛治先生の写真1とその説明を文献<sup>1)</sup>より次に転載する。



写真1 『初代校長関盛治先生 大正12.12.12~昭和7.5.14 東大工科機械 明36卒 信念と熱涙の人、初期の同窓に与えた感銘は大きかった』

### 1) 関校長の教育方針

『事業の第一線に立つものの養成を目的とし、そのための必須条件として、第1に身体の強健、第2に

満々たる覇気、横溢せる元気、第3に学才を掲げ、この3要素を統一する人格の向上を旨として教育に当たる。』とした。この特色は、東京帝大卒業後、九州鉄道(株)、豊田式織機(株)、名古屋・米沢・桐生高等工業学校、その間英・独に留学、東京帝国大学での教職を経て京都寿製作所専務取締役、など実業界と教育界の両方を行き来した経歴から生れたとも言えよう。

その実践として毎日1、2時間は全学生を校庭に出して体育をやらせ、学期末には学校の工場でまとめて10日程の実習を集中して実施した。そして関校長の信条は『教育は、熱なり、愛なり、感化なり』であった。

### 2) 落第制度の廃止

大正15年、3学年の学生が揃った時点で開校式が行われた。その校長式辞には「今日までの青年には青雲の志を懐いて世の中に出でながら、障碍に遭遇して当初の意気を喪失する人が少なくない。茲において我々は青年学生の自覚を促し、大局に処するの途を与えねばならない。即ち学生は単に機械的に注入される知識の容器であってはならぬ。然るに卒業証書獲得を唯一の目的と考えている学生が少なくない。彼らは学問の真の精神を忘れ、そのために心萎縮し、之より生ずる弊害は数えるにたえない。私は夙に、如何にして学生をこの軌範より脱せしめ、心広く、体裕に三年の学窓を過ごさせんものと思案し、遂に落第制度を廃止することを決意した」とある。

昭和7年建築科卒業の井口久義(元工業会九州支部長)氏によると「私は関校長の最後の卒業生。落第はなかったが、学校を1/3以上休んだ者は学校から追放処分であった」とのこと。

落第制度の廃止で学生の間には伸び伸びとした雰囲気広がったと言う。

第2代前田復三校長は就任挨拶で「本校は創立以来関前校長はじめ教職員の方々の熱誠なる指導と学生諸子の純真なる性情とによりまして師弟朋友間は著しく和合し、ついに情誼においては1家族とも言うべき和気あいあいたる学園を形成したのであります。(後略)」と述べている。

### 関校長留任運動

昭和7年3月、関校長は突然文部大臣に辞表を提出、その後帰福していないことが学生の間には伝わり、15日に在校生と在福の卒業生が集まり関校長の留任運動

を起こすことに決した。

関校長突然の辞任について、一部には現内閣の文教政策に飽き足らぬものがあり、現職にあるを潔しとせず、この挙に出たものではないか、との憶測もあったが、関校長は「辞表の理由は数年来腎臓病のため、ここ1、2年特に健康が勝れず職務に堪えられないためである。辞意について学生諸君が非常な心配をしてくれて喜んでいる」と心境を述べた。

一方、学生240余名は拇印をもって留任嘆願書に連判、教授、雇傭人に到るまで同様に連判し、学生総代3名、教授総代2名が上京、これを文部省に持参して留任を陳情した。

留任運動について学生代表は「本校は創立以来特色ある学校で、これは関校長のような特色ある校長をもっているからであって、吾々が福井高工を慕ってきたのもそこにある。その慈愛に満ちた我らの父が忽然として母校を去られることになれば暗黒に灯火を失う形で前途は暗澹たるものがある。故に子弟の真情として我らの父を慕うのであって、留任運動については穏健にして、少なくとも不穏な動作は絶対にしたくない。余り大げさになっては我等の父に報ゆる子弟の真情が水泡に帰すことになるから、みなも自重し、留任運動を進めるにしても日課の実習は忠実に実行している。」とその意図を述べた。

文部省でも、学生総代と教授総代が連判の嘆願書を持参、極力留任方を陳情したことに感じ、文部次官が関校長の辞意を思いとどまらせるよう一肌脱ぐことになった。しかし、昭和7年5月14日付、依願免本官の辞令が出され、関校長は退任することになった。

#### 胸像の設置とその後

関校長の退任を知った学生や卒業生の敬慕の念はせめて胸像へと向かったものであろう。この時卒業生は587名、選科修了生30名。これら全国に散らばった卒業生一同の願いが形になったのは校長退任から1年半。昭和9年11月3日(当時の明治節、現・文化の日)胸像は正面玄関付近に設置された。

その後、昭和16年、戦争で金属資源が払底していた政府は金属回収令を発した。最初は堀、門柱、手摺、看板などが指定され、戦局が悪化し始める17年後半には梵鐘、18年には仏具が回収の対象となり、19年1月には足羽山頂の橋本左内の銅像も対象とされ、貴金属の殆どすべてが強制的回収の対象となった<sup>3)</sup>。関校長の胸像も多分このときに供出されたと推測される。とすれば9年2ヶ月は健在であったことになる。

その後母校キャンパスは、昭和20年の米軍による空襲、23年の福井地震、そして水害と度重なる災害を蒙った。そして今、胸像が姿を消してから77年が過ぎ胸像のことは忘れ去られようとしている。

#### 胸像台座の現況

胸像も銘板も取り去られ、精確な記録も見当たらない台座ではある。しかし「卒業生一同」と言う彫り込みから歴史を辿ると、そこに浮かび上がってきたのは創立当時の師弟愛そして校長への熱い敬慕の念である。台座はその証しであり象徴と言えるのではあるまいか。

2006年8月、筆者は手作り木製の仮銘板に下記を墨書して台座に取り付けた。

「福井高等工業学校初代校長1923～1932 関盛治先生胸像台座 胸像と銘板は第二次世界大戦中に供出。福井大学工業会」

2009年5月、この台座について工業会理事会に報告した。胸像の復活あるいは校長の教育信条を胸像がわりに掲げるなどの案が出されたが結論には到らず、2023年の母校創立百周年の記念行事に含めることが合意された。

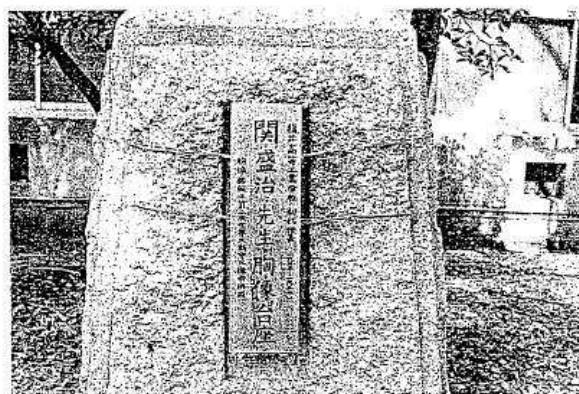


写真2 胸像台座正面



写真3 胸像台座背面

#### 【参考文献】

- 1) 吉田宏彦「福井高工 福井工専 福大工学部 建築科同窓名簿」福井大学工学部建築学教室1954
- 2) 「福井大学五十年史」財界評論新社1974.5.15
- 3) 「福井市史 通史編3、同資料編12」福井市(平成16年3月)、(平成10年3月)

#### お願い

胸像の記録をお持ちの方は福井大学工業会へお知らせ下さい。

